



つなぐちゃんベクトル

社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会社内誌 臨時増刊 104号 2010.7.21 発行 社会政策研究所

過去 1 年余りの間に、地方新聞に登場した知的障害者とのかかわりのある人をまとめてお届けします。その地道な実践を味わってください。【kobi】

子育てさがし 坪井久美子さん 子どもの特性に寄り添って

共同通信 2010.7.20

発達障害児とその親を支援する NPO 法人代表の坪井久美子さん
発達障害から学ぶ子育て

みんなちがってみんないい。発達障害児とその親を支援する NPO 法人「パルレ」代表の坪井久美子さん（58）が motto とする金子みすゞの詩だ。小6で発達障害と診断された長男（23）の子育て経験から学んだのは「障害の有無に関わらず、子どもの特性を理解して寄り添うこと」という。

しつけの問題？

長男の特性をはじめ指摘されたのは小学校入学前。同年代の友達がつくれず、集団行動が苦手だった。「小学校で問題になるかも」という幼稚園の先生の勧めで教育相談に行ったが、当時は発達障害の視点はなく「子どもはこんなもの」と一笑された。しかし、懸念は現実となる。

「持ち物はなくす。授業に集中せず、集合の合図も無視して好き勝手な行動をする。知的障害のない息子は一見普通なので、ふざけていると見られることも多かったようです。何度も学校に呼び出され『家庭でどういうしつけをしているのか』と言われました」

学年が進むと、いじめの標的にもなり、学校の屋上から飛び降りようとする事件も起こした。

「今にして思うと、分からずに追い詰めてしまっていたのかも。塾に行かせたり、友達づくりのためにスポーツクラブに入れたり…。『どうしてこんなことするのか？』がわたしの口癖になっていました」

診断が下って

当時、発達障害の一つである学習障害という言葉がメディアで取り上げられるようになっていた。半信半疑のまま専門医を訪ね、診断が下ったのは小6の時。

「診断名をきいてようやく納得しました。でも、医者からは『何かあったら来てください』と言われるだけ。情緒障害児学級も、当時は不登校の子どもが対象で、いじめに遭いながらも無遅刻無欠席で通学する息子は普通学級に行くしかありませんでした」

支えになったのは、同じ悩みを抱える親の存在だった。1998年、親の連携で積極的な情報収集を図ろうと、パルレを設立。パルレはフランス語で「話す」の意味だ。

「互いの悩みを話すことで、1人じゃないと思えた。海外では発達障害に対応した特別な教育が行われていて、日本でも、それを研究する専門家がいることを知りました」

学校長を説得して情緒障害児学級への通学を認められたのは中2の終わり。

「息子のペースにあった指導を受けて目に見えて表情が明るくなりました。勉強のしかたが分からなかっただけで、みんなと同じように勉強の達成感を得たかったですね。も



っと早くこうした環境を与えてあげたらよかった。こんな思いをするのはわたしたちで最後にしたいと思いました」

子どもに寄り添う

2004年、発達障害者支援法が成立。福祉と教育の谷間に落ちていた子どもたちによやく光が当てられた。小中学校の児童生徒の6.3%が該当するという文部科学省調査結果も公表された。

「6.3%という数字に驚いた人も多かったはず。でも、米国では、特別な教育を受ける子どもは約10%と言われています。一定期間特別な教育を受けた後で普通学級に戻る子や、成人して素晴らしい能力を発揮している人もたくさんいます。日本でも、画一的な学校教育の中で本来の能力を発揮できずにいる子どもはもっといるはず」

障害に対する根強い偏見も、適切な対応を遅らせる原因になっていると指摘する。

「我が子の障害を認めたくない親の気持ちもわかります。発達障害は障害というより個性。その個性を理解して寄り添うように、とアドバイスしています。子どもに『どうしてできないの?』と問い詰めるのではなく、子どもの視点で解決法を考えるというアプローチは、一般の子育てにも通じるものです」

長男は定時制高校を卒業後、一般企業に就職。その独特な感性には今も驚かされることが多いという。「長男のおかげで人生が豊かになった」という坪井さん。多様性を認めることで、社会も豊かになると信じている。

【一口メモ】発達障害...読み書きなど特定の分野を習得するのが著しく困難な学習障害(LD)や、注意力や多動性を自分でコントロールできない注意欠陥多動性障害(ADHD)対人関係や興味の持ち方などの発達が特異な自閉症などの総称。脳機能の障害が原因と考えられるが、大半は日常の言動からは判断が難しく「わがまま」「やる気がない」などと誤解されることも多い。坪井久美子(つばい・くみこ)さん 1952年東京都生まれ。98年に長男が発達障害と診断され、同年、同じ悩みを持つ親と「パルレ」を設立。99年から代表。07年に法人格取得。08年から品川区委託事業として「品川区発達障害思春期サポート事業(ら・るーと)」を運営する。

元横綱曙さんに特別功勞 74人、11団体を表彰 香取市社会福祉大会

2010年02月06日千葉日報[関東エリア]

特別功勞賞を受賞し、あいさつする曙太郎さん

香取市社会福祉大会が5日、同市佐原文化会館で市内の福祉関係者ら約800人が参加して行われた。社会福祉法人「香取市社会福祉協議会」(亀谷秀夫会長)の主催。同大会では、地域の社会福祉に貢献したとして、大相撲の元横綱、曙太郎さん(40)ら74人、11団体が表彰された。

曙さんは、同市小見川地区で知的障害者の支援活動を続けているNPO法人「いぶき」

(菅谷委佐雄理事長)の顧問として、17年にわたって市内の幼稚園や老人ホームなどを慰問。表彰を受け、「社会福祉のために体を張って頑張っていきたい」と話した。

主催者の亀谷会長(76)が「住民参加による地域のコミュニティづくりに取り組んでいきたい」とあいさつ。被表彰者を代表し、同協議会理事の本宮敏雄さん(57)が「香取市民の誰もが求める社会福祉の向上に努めたい」と述べた。

罪を犯した知的障害者を支援 内田扶喜子さん

神戸新聞 2010/01/10

知的障害があるゆえに、罪悪感が希薄なまま罪を繰り返す「累犯障害者」を支援する。「彼らに必要なのは刑罰ではなく、福祉への橋渡し」。一昨年8月から弁護士とチームを組み、



捜査機関の取り調べ段階や裁判での弁護活動、成年後見人としての支援計画作りに奔走してきた。

大卒後、静岡新聞社で勤務し、結婚を機に退職。関西に移りフリーライターと主婦業を両立していたが、長男が重度の知的障害と診断され、福祉に目を向けるようになった。

2002年に社会福祉士の資格を取り、NPO法人で高齢者・障害者の相談に携わると、生活に行き詰まって犯罪に手を染める知的障害者が少なくないことを知った。それに加え、逮捕・起訴・判決という刑事手続きの過程で、自身の内面や動機を上手に話せない「障害特性」が見落とされている現実にも直面した。

「障害を理由に罪が許されることはないけれど、健常者と同じ土俵に上がれないのは不平等でしょ」。裁判での証人出廷は数え切れない。法廷では、裁判官や検察官に福祉的な生活支援の重要性を訴える。

理想とする仕組みもある。罪を犯した知的障害者を、刑事施設ではなく、地域社会で更生させるオーストラリア・ビクトリア州の試み。「当事者の多くが、周囲から大事にされた経験がない。障害者を見捨てていない人がいることを知ってほしい」

高校教師の夫(54)と長男(26)、長女(24)との4人暮らし。信条は「できることからコツコツと」。52歳。西宮市在住。(飯田憲)



内田扶喜子さん

土門拳文化賞・最高賞に姫崎さん 知的障害者を6年間撮影

山形新聞 2009年03月05日



姫崎由美さん 酒田市教育委員会は4日、第15回酒田市土門拳文化賞の受賞者を発表した。最高賞の文化賞には、東京都杉並区の知的障害者グループホーム生活支援員・姫崎由美さん(42)の「gifted - 誰かが誰かを思うこと」が選ばれた。

全国から127人、134点(1点3枚以上30枚以内の組み写真)の応募があり、写真家の江成常夫、大西みつぐ、藤森武の3氏が選考した。姫崎さんの作品は、知的障害者を約6年にわたって撮影したモノクロ30枚の組み写真。「自然な表情を、被写体との絶妙な距離感で写している。写す者と写される側が、しっかりとした信頼のきずなで結ばれているから」など高い評価を得た。

奨励賞には、中国大連市出身で福岡市、大学院生劉●峰(りゅう●はんぶん)さん(38)の「旅順の中の日本 1905年 - 1945年」、神戸市、会社員徳平尚彦さん(44)の「限界都市」、宮城県大崎市、公務員氏家国浩さん(42)の「慈悲の花」が選ばれた。海外出身者の入賞は劉さんが初となる。●...日ヘンに含

土門拳記念館で、授賞式を22日に行い、受賞作品展を同日から4月19日まで開催する。5月11 - 24日に東京都の新宿ニコンサロンでも展示する。

同賞は、世界的な写真家で酒田市出身の土門拳の功績をたたえ、1994年に創設。アマチュアカメラマンが対象で、リアリズムを追求した土門の精神に通じる、記録性に富んだ作品が多いのが特徴。

たまには太陽の子・手をつなぐ、たまにはつなぐちゃんベクトル、たまにブログたまにはチェック



大阪市天王寺区生玉前町5-33 社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会 社会政策研究所発行